



キツネにも発信器。「ジャンプして餌を捕るときの妨げになる」との指摘も

●野生の尊厳を脅かされる知床のヒグマ

おぞましいことか。クマのいる場所には、正々堂々と自然に立ち向かう者がいるもののですよ」ヒグマに対する餌づけや「暴行」に

「八〇年代前半、北大ヒグマ研究グループが初めて、北大天塩演習林で発信器調査を試みたが、麻酔の失敗でクマが死んでしまった。その後も、買に掛けたクマが衰弱してしまい、ハンターに殺してもらったことがある。(本道のヒグマ研究の主流を担う)北大出身の連中には、研究者としての基本的な資質が欠けるのではないか」



知床五湖入り口のポスター。「五湖すべてをガイド付きで周遊を」の声もある

ついで、斜里町側は否定するが、この発信器調査をめぐる論争は、人と野生動物の付き合い方を問い合わせて試金石であることだけは間違いない。動物の付き合い方を問い合わせて試金石であることだけは間違いない。

ヒグマに対する餌づけや「暴行」に

こう指摘するのは、網走市に住む在野の研究家・小田島護さんだ。七〇年代初めから大雪山をフィールドにヒグマの調査を続けてきた小田島さんは、七月から八月にかけてアメリカを訪れて、「環境と文学」をテーマにした学会に出席したり、国立公園でのヒグマ研究の実態に触れてきた。

「斜里町や道の言う『資源管理』の考え方、アメリカの国立公園に倣つたもので、発信器調査もその一環だ。行ってみると、いい方向には進んでおらず、悪い形で野生を管理していた。しかし、人々に思想的な影響を与えていた人たちは、今後も発信器調査を続けることを善しとしていたなかつた」

「グレーチャー国立公園周辺でボランティア活動をしている、修士論文でクマの生態を取り上げた研究者がわたくしのエゴを出し合うのでは解決にならない」(石井さん)

わたしも石井さんの提案に賛成である。発信器調査を推進してきた行政や若手研究者には、ヒグマに対する畏敬の念を抱いていたアイヌ民族の自然観に学びつつ、先輩格の研究者や住民の声にきちんと耳を傾けて、謙虚な姿勢で臨んでほしいものだ。

森の王者・ヒグマが生活できる環境が保たれることを意味する。知床こそ、そうした自然環境を残しておいてほしい地域だし、発信器調査に象徴される、ヒグマの領域への行き過ぎた侵入行為は改めるべきだ。

を生かさないのか」と話していた。ナダでは、一万二千頭のシロクマのうち五千頭にイヤータグ(耳標)を付けたが、それをやつた人が、「これほどのことはしたくない。遠くからクマを眺めているのが好きだったのに……と漏らしていた」

行政サイドの若手研究者が手本にする北米の地にも、反省の兆しが表れて

行政サイドの若手研究者が手本にする北米の地にも、反省の兆しが表れて

情報公開を進め討議の場を

山中さんら若手研究者と門崎さんらとの論争の背景には、自然観や調査に対するスタンスの違いに加えて、行政側の縛り意識が見え隠れする。

「基礎調査や管理の手法などの作業を我々の見えないところでやつたり、道の見えないところでやつたり、道の見えないところが、彼らの限界だ」と、小田島さんが解説する。

門崎さんは七八年から二年に一度道内全市町村を対象にヒグマの捕獲と被害の調査を続けてきたが、斜里町は今年、「府内会議の結果、回答できない」と資料提供を拒んだ。支庁を通じて道に報告しており、個別に対応する必要はないと判断した。(町耕地林務課)の会が主催した講演会の席上、門崎さんは「発信器調査は動物虐待」と批判したが、そのことが尾を引いている。資料を提供しない自治体は斜里町のみであり、大人げない話だ。

「担当者に聞くと、わたしを招いた人たちが町の自然保護行政に反対しており、資料がそっちに回ると困る」と言ふ。驚いたね。斜里町は道内で最も住民自治の逆を行っている」と門崎さんが憤慨する。「野生動物と人間の共存」を唱える前に人間同士

いるというのである。

小田島さんの元には最近、実験動物の廃止を求める団体から、「知床の発信

器調査の実情を知りたい」という問い合わせがある。今後は環境庁や道に対

して、こうした調査をやめるようを望したり、質問状を出していくことを計画している。